

胃 淋 巴 肉 芽 腫 ノ 一 例

金澤醫科大學久留外科教室(主任久留勝教授)

副 手 中 村 富 夫

Tomio Nakamura

(昭和21年3月27日受附)

本稿ハ第10回北陸外科集談會ニ於テ講演セリ。

目 次

緒 言	術後経過
症 例	考 按
剔出標本所見	結 語
組織學的所見	文 獻

緒 言

淋巴肉芽腫ハ1898年 Sternberg 氏ニ依リ組織學的基礎ガ究明セラレテヨリ, 消化管ニ發生セル症例ヲ散見スルニ至ツタガ, 胃ニ原發セリト

認メラレル報告ハ僅カ數例デ, 今日尙消化管粘膜下淋巴濾胞ヨリ發生ノ可能性ニ就テハ, 甚ダ疑問ヲ持タレテ居ル状態デアル。

症 例

53歳ノ男, 漁師, 昭和16年5月頃ヨリ胃癌類似ノ症候ヲ呈シ, 本院内科デ胃癌ト診断セラレ, 當外科ニ轉ジタモノデアル。

局所々見ハ, 幽門部ニ近キ, 小彎側ノ, 大サ鶏卵大ノ, 瘤種瘤類似ノ所見デアルガ, 屎ニ粘液及血液ナ

ク, 精査セルモ着血ヲ認メナカツタ。胃液ハ總酸度可ナリノ減少, 遊離鹽酸ハ缺除シテ居リ, 癌細胞モ認メナイ, 淋巴腺腫脹ハ, 右腋窩以外ニハ認メラレナカツタ。胃癌疑診ノ下ニ, ビルロート氏第二法ニ從ヒ胃切除並ニ胃周囲淋巴腺廓清, 胃腸吻合術ヲ施行シタ。

剔出標本所見

腫瘍主要部ノ在ル前壁ヲ避ケ, 胃後壁ニ於テ胃長軸方向ニ切開シ, 粘膜側カラ概ルト第1圖ノ如クデ, 腫瘍部ハ胃壁肥厚シ, 胃粘膜缺損シ, 淺キ潰瘍ヲ形成ス

ルモ, 周邊ニ, 胃癌ニ見ラル、如キ定型的堤防狀隆起ヲ認メナイ,

組織學的所見

各層ニ互リ, 瀰漫性ニ, 一部ニハ密ナル集簇ヲ形成

スル著明ナ細胞浸潤ヲ認メル。此等ノ細胞ノ大部分ハ

類上皮細胞デ、少少ノ淋巴球、プラズマ細胞、エオジン嗜好細胞ヲ混ジテ居ル(第2圖)、此等ノ特殊細胞集簇ニハ、所々ニ類上皮細胞ニ似タ巨態細胞(Sternberg氏巨態細胞)ヲ散見スル(第3圖)、其ノ他結締織母細胞ノ増殖セル所モアリ、格子狀纖維ハ微細ニ分枝シ、集簇細胞間ニ進出シテ居ル(第4圖)、特ニ著シキ所見ハ、前壁大彎側部デ、一見粘液腫ヲ思ハセル様ナ、主腫瘍ノ收縮ニヨツテ生ジタ組織浮腫ヲ認メタ事デアル(第5圖)、本來ノ粘膜下淋巴細胞ニハ、特殊細胞ノ集

簇ヲ認メルガ、巨態細胞ハ殆ド認メラレナイ、此等ノ所見ハ後壁ニ於テハ何レモ輕微デアル、又特殊細胞ノ浸潤ハ、肉眼の病變ヨリ遙カニ廣範圍ニ及ンデ居ル、

腫脹セル 淋巴腺ニハ未ダ特異ナ變化ヲ示シテ居ナイ、以上ノ所見ヨリ、病變ハ主トシテ前壁小彎側ニ在リ、所見ノ中心ヲ爲スモノハ、特殊炎症性肉芽性變化デアツテ、且淋巴腺ニハ未ダ之ヲ證明シ得ナカツタノデアル、

術 後 經 過

退院後三ヶ月ニシテ再檢セルニ、脘膈上縁ト思ハレル部分及腋窩、鎖骨上窩等ニ累々ト淋巴腺腫脹ヲ認ム

ルニ至ツタ、

考 案

本症ハ別出標本ノ組織學的檢索、即チ類上皮細胞ヲ主要素トシ、之ニ 淋巴球、プラズマ細胞、エオジン嗜好細胞ヲ混ジ、更ニ 定型的ノ Sternberg 氏ノ巨態細胞ヲ證明シ、又胃周圍ノ多數ノ腫脹セル淋巴腺ニハ未ダ著明ナ特殊變化ヲ認メ得ズ、而モ後ニ至リ定型的全身の病變ノ相ヲ現ハシテ來タ點ヨリ、之ヲ胃ヲ原發竈トセル淋巴肉芽腫ナリト診斷スルニ躊躇シナイ例デアアル、

淋巴肉芽腫ハ潰瘍形成ヲ伴フ事多ク(Sussig, Mittelbach, Steindt), 胃ニ於テノミ浸潤型ヲ示シ(Duditz)又非特異性ノ炎症性變化ヲ伴フ事多イ(Baumgastner) 事ヲ記述セラレテ居ルガ、本例ニ於テモ之ヲ認ムル所デアアル、

消化管ニ發生シ、組織學的ニ確實ニ淋巴肉芽腫ト斷定セラレタル症例ヲ求メタルニ、30例ヲ得タガ、胃ニ原發セルハ僅カニ2例デアツタ、

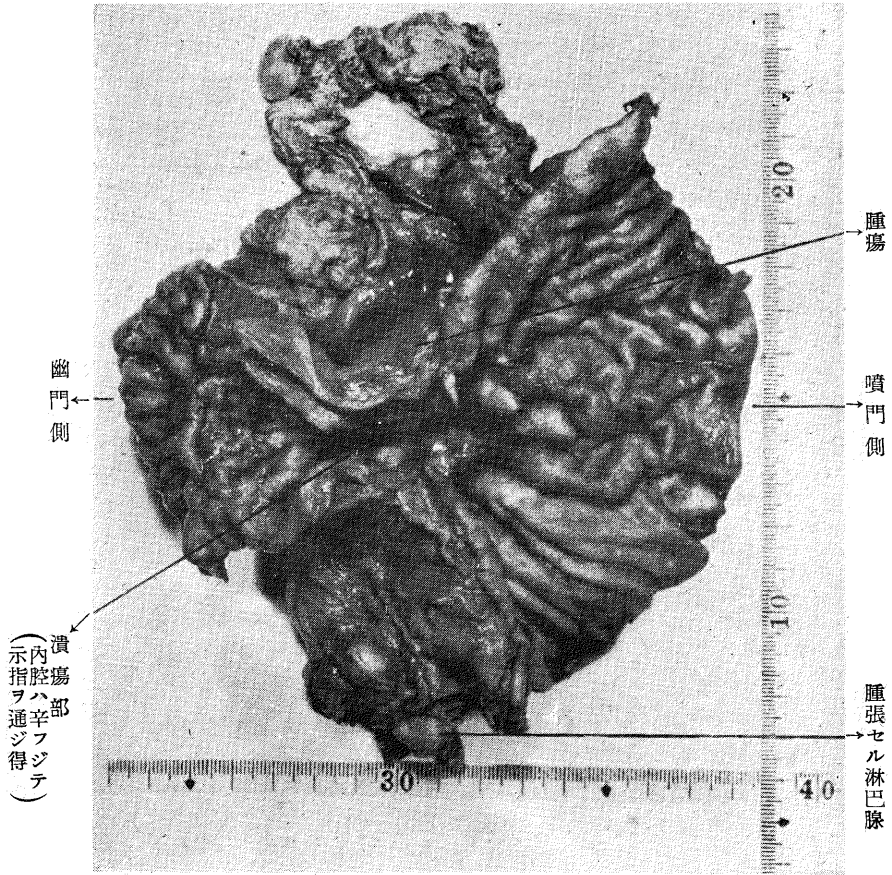
淋巴肉芽腫ノ本態ハ今日尙不明デアアル、最も主張セラレタル Schlagenhauer, Weinberg, Groot, Terplan 其ノ他ノ學者ニ依ル結核説、Löwenbach ノ微毒説、眞性腫瘍説、エオジン嗜好細胞説、含脂肪細胞説ノ外、Siegmund ノ「ペンツオール」、Brandt ノ「タール」ニ因ル説等アリ、何レモ一般的容認ヲ得ルニ至ラナイ、著

者ハ綿密ナル檢出ヲ試ミタガ、抗酸性菌、Langhans 氏巨態細胞等ヲ認ムル事ハ不可能デアツタ、又含脂肪細胞モ認メズ、含脂肪細胞説ヲ否定スルニ躊躇シナイモノデアアル、

Duditz ノ述ブル如キ、淋巴組織ニ極メテ親和性強キ、未知ノ病原體竝ニ其ノ本症ニ對スル病原性ハ、甚ダ確實性ヲ帯ビテ居ルト思考サレルガ、未ダ具體的ノモノヲ把握シテ居ナイ點デ學說トナスニ足りナイ、此ノ問題ニ關シ著者ノ調査シタ Giemsa 染色ニ依ル所見ヲ附言シテ置キ度イ、即チ恐ラク組織球或ハ中性嗜好白血球ト認メラル、モノノ中ニ、葡萄狀球菌ノ如ク集團的ニ存在シ、小球形ノ「アズール色素ニ濃染スル小顆粒體ヲ多數ニ認メ得タ、此ノ顆粒ハ所ニ依ツテハ、細胞外ニ溢脱セル如キ状態ヲ呈シテ居リ、何レノ場合モ「アズール」ニ依ル色調ハ同様デアアル、又「アセトン」ニ依ツテ脱色セズ、「グラム陰性デアアル、斯カル顆粒ヲ有スル細胞ハ、核ハ稍々大キク且不正形デ、主トシテ血管壁ニ多ク認メラレル、此ノ顆粒ノ性状ハ、鼠蹊淋巴肉芽腫ノ病原體トシテ擧ゲラレテ居ル宮川、三田村氏小體ニ酷似シテ居ルガ、本例ノ顆粒ハ其ノ大サニ於テ遙カニ大デアアル様デアアル、(第6圖)

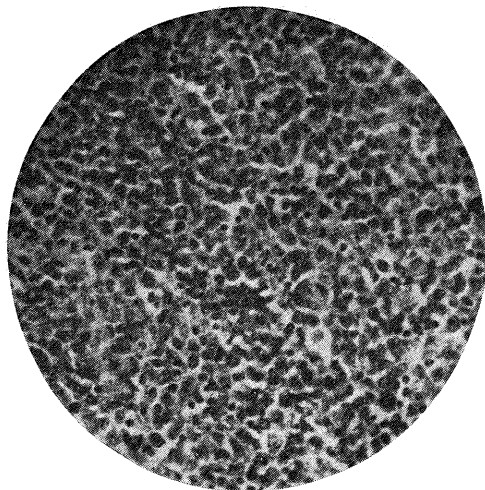
中村論文附圖 (1)

第 1 圖



剔出胃後壁ニ於テ胃長軸方向ニ切開ス

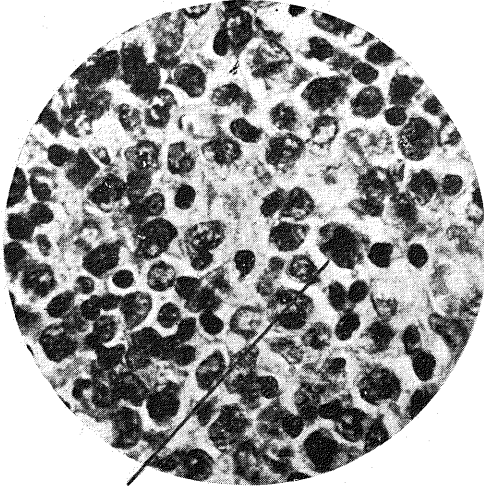
第 2 圖



特殊細胞ノ集簇ヘマトキシリン・エオジン染色270倍

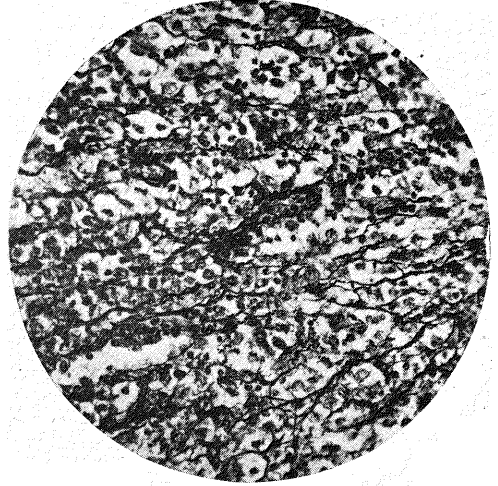
中村論文附圖(2)

第 3 圖



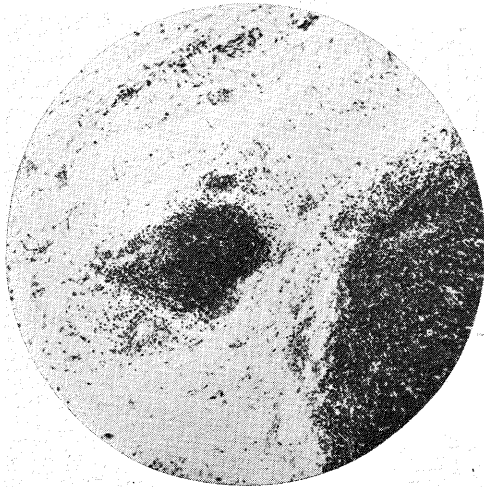
Sternberg氏巨態細胞特殊細胞集簇部ノ強擴大,
ヘマトキシリン、エオジン染色700倍

第 4 圖



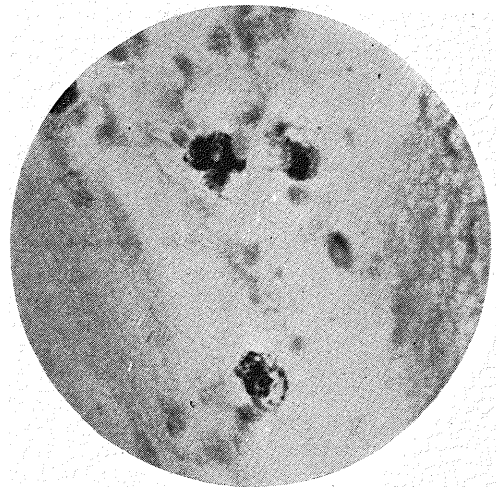
箇々ノ細胞間ニ於ケル格子狀纖維ノ狀況
Bielschowsky氏染色、270倍

第 5 圖



粘液腫様變化ヲ呈セル部分 ヘマトキシリン、
エオジン染色、80倍

第 6 圖



特殊顆粒小體ヲ含む細胞 Giemsa 染色、700倍

此ノ問題ニ就テハ將來更ニ研究シ度イト考ヘテ居ル。

結 語

胃病疑診ノ下ニ剔出セル胃ノ組織學的檢索ニ依リ、胃淋巴肉芽腫ナル事ヲ確證シ、更ニ本症ノ病因論ニ考察ヲ加ヘ、最後ニ宮川、三田村氏小體酷似ノ顆粒ニ就テ記載シタ。

撰筆スルニ臨ミ、終始御懇篤ナル御指導ヲ賜リタル久留教授並ニ教室員佐野、高瀬兩先生ニ深謝ノ意ヲ表ス。

文 獻

- 1) **Kratochivil-Kamniker**: Dtsch. Ztschr. f. chir. 247, 1936. 2) **Roman**: Beitr. Zt. Path. 97, 1936. 3) **Supino**: Zbl. f. Allg. Path. 62, 1935. 4) **Andor-Duditz**: Beitr. Zt. Path. 92, 1933. 5) **Mariamittelbach**: Zbl. f. Allg. Path. 55, 1932. 6) **Paltauf**: Zbl. f. Allg. Path. 54, 1931. 7) **Sternberg**: Beitr. Zt. Path. 87, 1931. 8) **Sussig**: Dtsch. Ztschr. Chir. 226, 1930. 9) **Terplan**: Virch. Arch. 271, 1929. 10) **Brandt**: Virch. Arch. 279, 1929. 11) **Thiemer**: Dt. Ztschr. f. chir. 205, 1927. 12) **Coronini**: Beitr. Zt. Path. 80, 1928. 13) **Lubarsch**: Zbl. Allg. Path. 23, 1923. 14) **Terplasi**: Virch. Arch. 237, 1922.